

相馬地方女性消防隊連絡協議会 ヒアリング記録

日 時 平成23年12月13日（火）13:00～

場 所 相馬消防署

参加者 立谷 品子 相馬地方女性消防隊連絡協議会会長
相馬市女性消防隊隊長
古市 浩次 相馬市役所地域防災対策室
庄司 功 相馬市役所地域防災対策室
中城 光浩 相馬消防署



1. 背景

相馬市は、福島県北部の太平洋側に位置し、北は新地町と宮城県に、西は伊達市、南は飯舘村と南相馬市に隣接し、東西約28km南北約13kmの市域を擁している。

西半分は阿武隈山地に連なる山間部が、東半分は市街地を含む太平洋側の平坦地が広がっており、沖合の豊かな漁場の恵みによる漁業と、豊かな自然と適度な気象条件を生かした稲作を中心に畜産や野菜、果樹などの農業が盛んで、工業団地の開発・誘致なども積極的に行われてきた。

震災前は人口約3万8千人・1万3千700世帯が暮らしていたが、東日本大震災では9.3m以上の大津波が押し寄せ、457人の犠牲者と2名の行方不明者を出している。

相馬市では、女性消防隊が10地区で結成されており、西側の被害の少なかった地区の女性消防隊員によって、炊き出しを中心とした被災者の支援活動が展開された。1日1万個以上のおにぎりを握った地区もある。復興への道のりは平坦ではないが、女性消防隊の各地区隊長は、地域の復興と防火・防災活動の活性化に取り組む意思を強く持ちながら取り組みを継続しており、今後も地域の重要な担い手としての活躍が期待される。

2. 詳細

①災害直後の状況（立谷会長）

わたしは原釜地区というところに住んでいるが、震災時は海岸から 200m ほどの高台に建つ自宅にいて、立って入れられないほどの大きさで何回も揺れていたのが天井ばかり見ていた。

その後少ししてから、自宅のすぐ下まで津波が来たので、近くの津神社へ逃げたが、下の家々はみな津波の被害を受けている。相馬市は（太平洋岸南部の）いわき市などに比べて、津波の大きさが非常に大きかった。

地震後、逃げた人と逃げなかった人がいて、逃げなかった人は目の前で波にのまれていったが、それはこんなに大きな津波が来るとは思っていなかったからであろう。また、意外にも長老の人が、「こんなんで津波なんて来ねえ」、というので、「この人がそう言うのなら来ないのだろう」、と思って逃げなかった人もいたと聞く。

津波がすぎた後で神社から自宅を見ると、屋根に若い人が 3 人いた。翌日その若者の 1 人が来たので、なぜ屋根にいたのか？と聞いたら、津波が来るというので 3 人で車に乗ってその様子を見に行ったところ、津波が来てしまったので、自宅のすぐ隣のホテルで避難階段から登って、うちの屋根の伝いに 2 階の屋根に上って助かったのだという。

自分の家族は無事だったが、周囲で亡くなった方はたくさんいる。消防署の屯所には続々とご遺体が運ばれてきて、ご家族が大声で泣いているような状況が続いた。亡くなった方は 500 人近い。なお、女性消防隊は全戸加入なので、隊員で亡くなった方はいるが、集落の役員をしている方で犠牲者はいなかった。

津波は真っ黒で、津神社の周囲をダーッと川のように流れて行ったが、波をかぶってばらばらになった方や、瓦礫の中を泳いであちこちを骨折した人もいた。津波にのまれながらもなんとか逃げてきたひとは、全身ずぶ濡れでぶるぶると震えていたので、いろいろ着せたりカイロを持たせるなどしてから、公民館や町の中学校へいたり、山の方へ行ったりと、転々とした避難生活だった。

わたしたちは、津神社からさらに上の公民館へ移動したが、電気・水道が全てだめなので、みなさんはその日の夜のうちに町のアリーナなどにバスで分散移動した。公民館ではトイレが大変で、排泄物で山になった。また、はじめの日は食べるものが何も無く、大人はがまんできたが、中学生などは気の毒だった。

わたしは 8 人家族だが、若い人たちだけを避難所へ行かせて、自分たち夫婦は自宅に戻り、車の中ですごした。自宅は津波こそかぶらなかつたものの、修理はいろいろと必要な状態だった。

今回、女性消防隊のみなさんは本当に尽力してくださったが、わたし自身は事態の大きさにその後はあまり動くことができなかつたことと、わたしたちのような在宅難民の生活もまた厳しい状況だったことは言える。避難所にはいろいろ支援がいくが、自宅で避難生活を送る人のところにはしばらく何も来なかつたし、加えて原発事故の影響でお店でものが買えない状態。

仕方がないと我慢していたが、2 週間ぐらいしてからようやく公民館に支援が入っておにぎりを作ってくれるなど、いろいろな支援を受けた。

②全般（女性消防隊としての活動や個別課題など）

■女性消防隊としての取り組み

相馬市は広く、女性消防隊も 10 地区で構成されているが、震災直後は行政より津波が来なかった地区の隊長さんたちに連絡をして、炊き出しの要請をしていたことから、各地区の女性消防隊のみなさんが本当に尽力してくださった。

新年に発行する女性消防隊のお便りに、わたし自身の思いと、各地区の隊長さんたちに当時の様子を書いてもらっているのでご紹介したい。

< “お便り” の新年原稿より >

・相馬市女性消防隊立谷隊長

「3月21日、地震・津波のあと自分たちも被害を受けたにも関わらず、中村南、中村北、山上、八幡、玉野、大野、日立木地区は隊長を中心に避難してきた皆さんに炊き出しを行いました。1日1万個以上のおにぎりを作った地区もありました。<中略>東部、飯豊地区の女性消防隊は、津波で被災したにも関わらず、在宅で不自由な生活をしている人達へ、公民館、区長のもとで物資を配ったり、風呂に入れてもらったり、公民館に寝泊まりして捜索している消防団の人たちへの炊き出しなどをして、地域、消防団から喜ばれました。磯部隊長は自分の自宅も流され、何もかも無くなり仮設住まいですが、仮設の組長をし、皆さんのお世話をしています。いつも女性消防隊の皆さんの行動力と笑顔には励まされます。

震災の一月前に相馬市女性消防 50 周年記念大会を行いました。50 年の歴史に感謝し、安全な町づくり、安心して住める相馬市を作ろうと約束したばかりでした。その一月後にこの大地震が起きたのです。津波の恐ろしさは想像を絶するものでした。いつまでも沈んではダメ！女性の元気が相馬市復興の力になろう——！と“火の用心”ののぼり旗 400 枚と各地区ごとの横断幕を作り、各地区に取り付けました。相馬が元気になったね！笑顔が多くなったよ！と喜びの声を頂き、暑い盛りに取り付けた苦労が飛んでしまいました。

<中略>もっともっと相馬に笑顔が戻るように困難に立ち向かっていこうと思いますので、本年も一層のご協力、ご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます」

・玉野地区荒隊長

「(このたびの東日本大震災で感じたのは) 隊員の協力心、底力。愚痴一つ言わず朝早くから一生懸命おにぎりを作りました。家を流され、家族を流され、船を流されたみなさんのことを思うと、どうにかしてやりたい！という気持ちが隊員の協力心が生じたのだと思います」<中略>「今まで親しくしていた人が冷たくなって消防屯所に並べられ家族の悲しむ姿を見ると、心と頭は全く正常ではありませんでした。この現実を受け止めるまでかなりの時間、日数が掛ってしまいました。東部沿岸は全て変わってしまいました。以前のような姿に戻るように毎日願っています」

・日立木地区渡辺隊長

「公民館避難者への食事作り、自宅の風呂の開放、一人暮らし老人への食事配達（などを実施）」

・大野地区木幡隊長

「4月16日まで約1カ月間おにぎり作りを大野小コミュニティで自衛隊と一緒にしました」

・飯豊地区高坂隊長

「巡回している岩子、柏崎、新田、南飯渕の消防団の人たちへの炊き出し。度々の津波情報で避難しながらの炊き出しでした」

・八幡地区郡隊長

「3月11日夕方6時30分より米持参で炊き出しを始めました。3月23日から八幡小学校に避難している人達が温かいものが食べたいということでカレーとかお汁とかを作りました。材料は地区の人たちが持ち寄ってくれました」。

・磯辺地区星隊長

「自ら被災したが、仮設の組長をし皆さんのお世話をしています」

・中村南地区佐々木隊長

「文句も言わず一生懸命働いてくれた隊員の方々に感謝です」

・中村北地区吉田隊長

「今回の災害で水、電気、ガス、ガソリンの不足ですごく不便を感じました。節約の工夫がこれから大事だと思います」

・東部地区宍戸隊長

「避難しているみなさんの所に行き心のケアをしてきました」

・山上地区島隊長

「それぞれに出来ることで強力して下さった隊員の方々に御礼申し上げます。いざとなったら助け合える“絆”の大切さを学びました」

女性消防隊の力で炊き出しを行ったのは1週間から、中には1カ月近く実施された例もあるが、最初のころは炊き出しをしようにも何もなく、みんなでコメを出し合ったりして行っており、山間部の方の人に本当に助けられた。

当時はガソリンがなくて運ぶのも大変だった時だが、野菜や漬物、味噌などなんでもみなさん出してくれた。また、玉野地区には大きな養鶏場があり、電気もだめだと冷蔵庫もダメになるので、卵をどんどん持ってきてくれて助かった。その後はボランティアの方たちなどが支援してくれた。

交通事情に関しては、道路自体通ることができたが、原発事故の影響であまり外部からはいってこない状況だった。支援物資については、避難所や各地域に届き始めたのは1週間ぐらいしてからであったが、それでも足りなかった。

■その他（課題など）

○この辺りは大きな津波が来たという経験が無いので、波がきて驚いて逃げた、という人が多い。言い伝えも聞かない。チリ津波のときは、もくもくときて防波堤も超えなかった。原釜地区と尾浜地区は波が引けたのが見えなかったようだ。ある地区では、波が大きく引けたのが見えたので、「津波がくるぞっ!」と言ってみんな逃げて、それで誰も犠牲者が出なかったと聞く。どこか他の地域では、町長が大声で逃げろーっ叫んで、それで、これは本当ではないか、と思ってみな逃げて、犠牲者が出なかったということも聞いた。

○警報に関してだが、防災無線は聞いてはいるし、消防団が広報して回ってくれていたが（それでも犠牲者が出ている）、「津波がきます〜と」温和な声で言われてもだめで、「大きい津波がくるぞおーっ!!」と悲痛な声で言われないと理解できない。

○今回、消防団員や警察官が亡くなっているが、死ぬまで現場にいるというのは、あってよいことではない。みなさん家族がいるのだから、直前まで現場にいるというのは違うと思うので、たとえば 20 分程度は広報しても、それ以上はもう逃げるべきだろう。

その代り、津波の予報や訓練をきちんとすべきだと思う。

○指定された避難場所自体は、きちんと逃げていれば助かった所にあったが、そういう一次避難所が孤立したケースはあった。

○本当にいろいろな人が支援してくれたが、仮設住宅では待遇がそれなりによく、心のケアをはじめ支援もあるのでみなさん助かっているという。ただ、たとえばふと夜などに、このままで先はどうなるんだろう、と不安に思うことがあると話す人もいる。

○在宅の被災者は、衣類なども流されてはいないし大丈夫ではあるが、私たちの地区は漁民が多い。原発事故による放射性物質による汚染の問題で、海に出られない状態が厳しい。地震のあと、津波がくる！ということで、みな沖に船を出して船をなんとか守ったのに、それなのに漁に出られないって、本当に悔しい、地震と津波は天災だからそれはいいけれども原発は許せない、とみなさん言っている。

3. 今後に向けてとメッセージ

■分析と組織の今後

○震災直後の、被害の少ない地区の女性消防隊による支援活動と、その時の各地区隊長の当時の思いを踏まえると、日ごろの関係性を背景とした地域間連携ができていたといえる。

会長によると「普段からべたべたと付き合っていたというわけではないのだが、相馬市のひとは人情がとて厚いので。みなさんで本当に支援してくれた」とのことであった。そうした風土が培った温かい人柄はもちろんのこと、互いに協力しあいながら自分たちの地域は自分たちで守るという強い信念と責任感、そして広域的な組織間の交流が、迅速な支援活動へ結び付いたといえよう。

○他団体との関係に関しては、全戸加入であるため隊員はみな婦人会などにも入っており、それぞれの会長同士での連携もあるため、活動はスムーズである。

○相馬地方の女性消防隊は、この地震・津波を経ても組織としてしっかりとしているという。

○こうした防火・防災に取り組む組織に入っているのと入っていないのでは、住民としての意識が違うことと、海の津波だけでなく、山津波もあるのだから、県民みなが意識を高められるよう、女性消防隊も全戸加入となるとよいのではないかと、消防署員も増やしてもらいたい、との提起もなされた。

○日本防火協会より広域消防を通していただいた募金は、人数で分けて、とにかく相馬を元気

にしようということで活動に取り組んでいるとのことで、その一環として横断幕やのぼり旗を400本作り、がんばろう！と地域全体に応援メッセージを送り、みんなの活力にしようとしている。

○また立谷会長は、今まではAEDの講習に力を入れ、炊き出し訓練も自衛隊と一緒にやったりはしていたが、何ととっても命あつてのことなので、今後は津波からの避難訓練も非常に大切だと考えている。

○ある地区の隊長さんは、自宅を失って仮設住宅入っているが、そこでまた組長を引き受けている方もいるなど、地域への貢献力という意味で、女性消防隊の存在は大きい。

○このように、女性消防隊のみなさんは、町を守り復興させて行こうという気概を持ちつつ、以前から発生間近と言われており、女性消防隊でもたびたび話し合ってきた宮城県沖地震も念頭に、活動を継続・充実させていくとのことであった。

■メッセージ

○今回の災害を経て教えられたことは、やはり訓練の重要性。たとえば震災前でも、防災訓練の参加は少なく、津波からの避難訓練などもやってみたが、女性消防隊の役員が出てくるぐらいであった。しかし今回の大災害を受け、みなさんの意識も変わってきているであろうことから、少し落ち着いたら訓練にも取り組んでみたいと思う。

○いろいろと応援頂きありがとうございます。